

## 追悼 日本理化学工業 大山泰弘取締役会長

平成31年2月7日、大山泰弘取締役会長が逝去されました。

平成26年11月に、会長にインタビューした内容を掲載いたしました。会長を偲び、抜粋記事を再度、掲載いたします。会長のご功績を偲び、謹んで御冥福をお祈りいたします。



### 皆働社会の実現と日本語へ応援メッセージ

日本理化学工業株式会社は、昭和12年創業のチョコレートメーカーの老舗です。同年に開発された日本で最初の衛生無害な炭酸カルシウム製チョコレート「ダストレスチョコレート」をはじめ、ガラスや鏡などに書け、濡れた布で消せる「キットパス」など、広く愛されている製品を作っています。また、同社は1975年、川崎市に日本初の知的障がい者多数雇用モデル工場を開設し、その雇用割合は7割を超えています。障がい者雇用を積極的に推し進めてきた、会長の大山泰弘さんにお話を伺いました。

「私の歩みは、知的障がい者が歩ませてくれた道なんです」

あるとき、養護学校の先生が訪ねてきて、生徒を就職させて欲しいと頼まれました。最

初は「とんでもない」と断ったのですが、またやって来る。そして3度目にやって来たときに、「分かりました、もう就職させてくれとは申しません。彼らは就職できないと、施設に入ってしまうんです。働くことを知らずに人生を終えてしまいます。どうか、何日でもいいから働く経験をさせてやってください」とお話しされました。それがきっかけで、知的障がい者2名の2週間の就業体験を受け入れたと言います。

ところが、就業体験を終えるころになると、従業員たちが「私たちが面倒を見ますから、来ていいって言ってくださいよ」と言う。そうした従業員たちに背中を押され、翌年、その2名が入社しました。

その数年後、当時は専務だった会長は禅宗のお坊さんに尋ねました。

「うちの会社には数名の知的障がい者が働いています。施設で生活すればもっと楽に暮らせるのに、どうして彼らは一生懸命働くのでしょうか？」

するとお坊さんは次のようにおっしゃいました。

「人間の幸せは、人に面倒を見てもらって楽に生きることではない。人間の究極の幸せは、人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、人から必要とされることだ」深く納得した会長は、それ以後、一人でも多くの障がい者が働ける場にしようと決意し、重度障害者多数雇用モデル工場を作り、彼らだけでほぼ全ての作業ができるよう、業務内容に工夫を凝らします。

「どんな人にも才能があり、役に立てることが嬉しいから毎日やっている。役に立てるように、周りが支えてあげればいいんです。一人ひとりが一生懸命働くことのできる環境さえあれば、皆、どんどん技術を向上させていけるんです。社会の対応をそういう風にすればいい」

大山会長は「皆働社会」を世に伝えることを使命に掲げています。

「皆働社会」とは、国が重度障がい者に規定の最低賃金を負担し中小企業に委託することで、障がい者が、働く幸せを感じながら自立できる社会です。

「皆働社会」は、国・本人・企業・家族のまさしく「四方一両得」になる社会です。「皆働社会」が実現したら、間違いなく日本は世界から進んでいると言われるはず。なぜならば、日本の中小企業には手取り足取り教える「職人文化」があり、卒業後すぐに企業に就労できて幸せになる皆働社会は「福祉の直行便なんです」と会長。

「張り合いのある企業のなかで、人のために働き、役に立ち、必要とされるまで頑張れば、必ず愛される人間になります。じっと閉じこもっていたのでは幸せになれません。人は誰も努力しなければ愛されないのです」

皆が働き、幸せを得られる社会を提言されている大山会長が、日本語検定に応援メッセージをくださいました。

「近年になって、ようやく日本語を自分たちの言葉として大事に使うという気風が出てきました。普段使っている言葉が、どうしてこういう文字なのかを考え、意味を知って使うことが大切だと思います。そうすると日本語により親しみを感じられるのではないのでしょうか。日本語検定をきっかけに、正しい日本語を日常に活用できるようになって欲しい。文字の意味を知ること、自分の生き方の参考になることもあると思います」

大山会長のお話を伺い、改めて日本語の奥深さ、素晴らしさに気付くことができました。日本語検定でも、大山会長が提唱なさっている「皆働社会」の実現を応援し、「皆働社会」という社会のあり方を多くの方に広めたいと思っています。

大山会長、どうもありがとうございました。